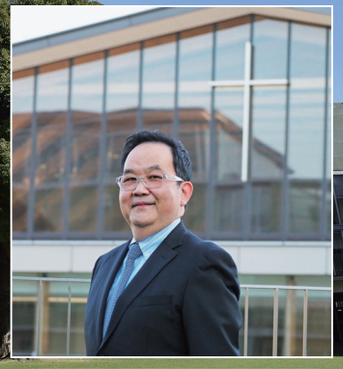
人と社会のために尽くす サーバント・リーダーを育成

青山学院初等部

2024年11月に、創立150周年という大きな節目を迎えた青山学院。その中で、1937年に創設された初等部の根底にもキリスト教教育、すなわち「神さまから与えられた賜物」を生かす教育が流れています。ただ教えるのではなく、子どもたちが自ら学び、体得し、成長していく、そうした「人間力」を培う教育を作り上げていくため、全校を挙げて取り組んでいます。



初等部　部長　小澤 淳一

明るく伸びやかな校風の中、「自分自身と隣人を愛せる人」を育成

幼稚園から小・中・高等学校、そして大学・大学院までを擁する青山学院のスクール・モットーは「地の塩、世の光」です。

新約聖書の「マタイによる福音書」には、「あなたがたは地の塩である」、また「あなたがたは世の光である」という言葉があります。塩には浄化作用があり、隠し味に塩を少し足すだけで味が変わるという作用もあります。そうした、世にあって塩のような働きをする人材をつくるというのが「地の塩」です。

そして、自分の行いで周りの人々を照らす働きをすることが「世の光」です。聖書では「その光を人々の前に輝かせなさい。あなたがたの立派な行いを見て、周りの人々が神さまのことを知るようにしなさい」と続きます。

「自分が輝くのは自己顕示欲からではなく、『神さまだったらどうされるか』を深く考えながら行動することで、この世の光として輝きなさい、ということを教えているのです」と、小澤淳一初等部長はスクール・モットーの表わす意味について説明します。

礼拝の時間

自己と対話をする「礼拝の時間」

初等部の一日は、約30分の礼拝の時間から始まります。それは、子どもたちが自己と対話する機会にもなっています。

「初等部が大切にしている聖句に、『何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにしなさい』という言葉があります。イエス・キリストが生きていた2000年前の世界には、『人にしてもらいたくないことは、相手にもしてはいけない』という考え方がありました。しかし、それは『他人に迷惑さえかけなければ、何をしてもいい』という考えにつながりやすい。そうではなく、人からされてうれしかったことを積極的に行うことこそが大事なのだと、聖書は教えているのです。これは初等部の根幹にある重要な教えで、礼拝堂の中央に掲げられた校章の周りには、この聖句が英語で刻まれています」（小澤部長）

そして、もう一つは「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」ということ。イエスの時代よりずっと古い旧約聖書にも「隣人」という言葉は出てきますが、そこには「自分の同胞」という限定的な意味しかありませんでした。それをイエスは拡大解釈し、「敵も味方もなく、誰に対しても同じように愛するのだ」と教えたのです。とりわけ重要なのは「自分を愛するように」ということ。自分を愛せない人は、人を本当に愛することはできない、という教えが込められているのだと小澤部長は説明します。

サーバント・リーダーを育成

また、初等部では、すべての人と社会のために未来を拓く「サーバント・リーダー」を育成することを目指しています。

初等部には6年生と1年生がペアになり、登校時や給食の時間など、さまざまな機会にお世話をする「パートナー制度」があります。異年齢と交わることで、1年生はこれまでできなかったことができるようになり、6年生も思いやりや優しさの心を育むことができます。

その活動の延長線上にあるのが、毎週水曜日の放課後に5・6年生が参加する「プロジェクト活動」です。これは、自分たちの生活を自分たちで考えるために行われる取り組みで、環境やSDGs、防災など、社会奉仕活動にもつながる15の取り組みが行われています。このように、初等部の学びには、すべての人と社会に仕える人間を育成する多彩な仕組みが取り入れられているのです。

オーストラリア・ホームステイ

『成長の記録』で個性を伸ばし、「未来に求められる力」を養う

青山学院は創設時から、先導的な教育を展開していることで知られます。

初等部の大きな特徴の一つは「通信簿がない」こと。その代わりに、学期ごとに何ができたか、これから課題になるのは何かといった自己評価を子どもたち自身で『成長の記録』に書いてもらい、教師と保護者にプレゼンをします。それをもとに三者で話し合いながら、その先の学びについて丁寧に考えていくのです。

「子どもの教育には家庭の協力が欠かせませんが、授業参観日も他校のように決まっているわけではなく、朝の礼拝から下校時刻まで、学校生活を丸ごと見てもらうことができます。教室もフルオープンの作りで廊下から中が見られますし、声も聞こえるので、子どもたちの様子をしっかり把握することができます」（小澤部長）

また、初等部は1965年に、いち早くランドセルを廃止しました。これは「学校が学習の基地」だということ。自宅が学習の基地だと、教科書は家にあり、時間割に合わせて教科書やノートを毎日ランドセルに詰め、登校しなければなりません。しかし、「ランドセルのない学校」は学校が学習の基地ですから、教科書もノートも全部学校にあり、『今日はこの分野を復習したい』と思った時に、その教科だけ持って帰ればよいのです。

その根底には、常に問題意識をもって未来を拓く教育と向き合ってきた青山学院の姿勢が現れています。特に今日ではタブレットがあり、電子教科書のほか、プリント類なども児童全員に配信しているので、ランドセルはますます必要がなくなってきています。

充実の英語教育と情報化教育

「英語の青山」と言われるように、外国語教育の充実も大きな魅力です。

英語教育では、小学1年から高校までの12年間を4-4-4年で区切り、独自の「SEED BOOK」という教材を使いながら学んでいきます。英語そのものの理解を深めるため、背景にある英語圏の文化も含めて学ぶ教材になっています。希望者には夏休み中のオーストラリア・ホームステイやイングランド・サマープログラム、春休みのフィリピン訪問など、国際交流の機会もあります。

また、情報化に対応した授業やプレゼンテーションの機会を多く設けているのも特徴です。1・2年次は「手を使ってきちんと書く」ことを重視していますが、3年の2学期頃からはタブレットを活用し、教室の電子黒板と連動して、パワーポイントでスライドを作ったり、動画を作成したりする授業も取り入れています。

「プレゼンテーションに関しては、例えば農漁村の生活を調べるため、2年次に千葉の館山へ行き、そこで地元の人々の話を聞きながら、実際にサツマイモや落花生の苗を植え、それを秋に収穫するといったフィールドワーク型の授業も行っています」（小澤部長）

6年間の集大成「洋上小学校」

1年生の「なかよしキャンプ」に始まり、3・4年生の「山の生活」、5年生の「平戸 海の生活」、3年生から6年生までが全員参加する学年縦割りの「雪の学校」など、豊富な宿泊行事を通じて思いやりや信頼の心、生きる力と行動力を養っているのも初等部の大きな特徴です。

その6年間の集大成として、1972年に始まり50年以上の歴史を誇るのが、8泊9日に及ぶ「洋上小学校」です。日本は海に囲まれた島国だということを児童に体験させたいという発想からはじまったもので、日本一周と同等の航行距離になるように寄港地を巡っていきます。

船旅というとクルーズのような優雅なイメージがあるかもしれませんが、児童は乗船すると船員帽をかぶり、「小さな乗組員」として船内や寄港地での活動に取り組みます。東海汽船の船員さんたちが本当に子どもたちに愛情を注いでくださり、ブリッジや機関室など、普段立ち入ることができないところの見学も許されています。

こうした行事すべてに共通して言えるのが、「学校だけが学びの場ではなくて、子どもたちがいるところが『学校』であり、そこで子どもたちと関わるすべての人が先生なのだ」ということ。「神さまから与えられた賜物を生かす」教育が初等部には溢れています。

「青山学院は明治初期の1874年、米国の3人の宣教師により設立された3つの学校を起源とし、昨年11月には創立150周年という大きな節目を迎えました。初等部は明治から昭和期にかけ活躍した銀行家で、日本にロータリークラブを初めて設立した米山梅吉が1937年に私財を投げ売って開校した青山学院緑岡小学校に始まります。まさに、初等部は先達のサーバント・リーダーの熱い思いで誕生した学校なのです。こうした歴史を継承し、本校の素晴らしさを十分に理解した上で、ぜひとも本校に来ていただければと願っています」と、小澤初等部長は青山学院初等部を目指す皆さんにメッセージを送っています。

洋上小学校